

# 京都と観光産業

スコットランドに学ぶ



[ バルブレア ]

[ スタッファ島行きの船 ]

神戸学院大学名誉教授・春日雅司 (2020.11.06)

# 「観光」の意味

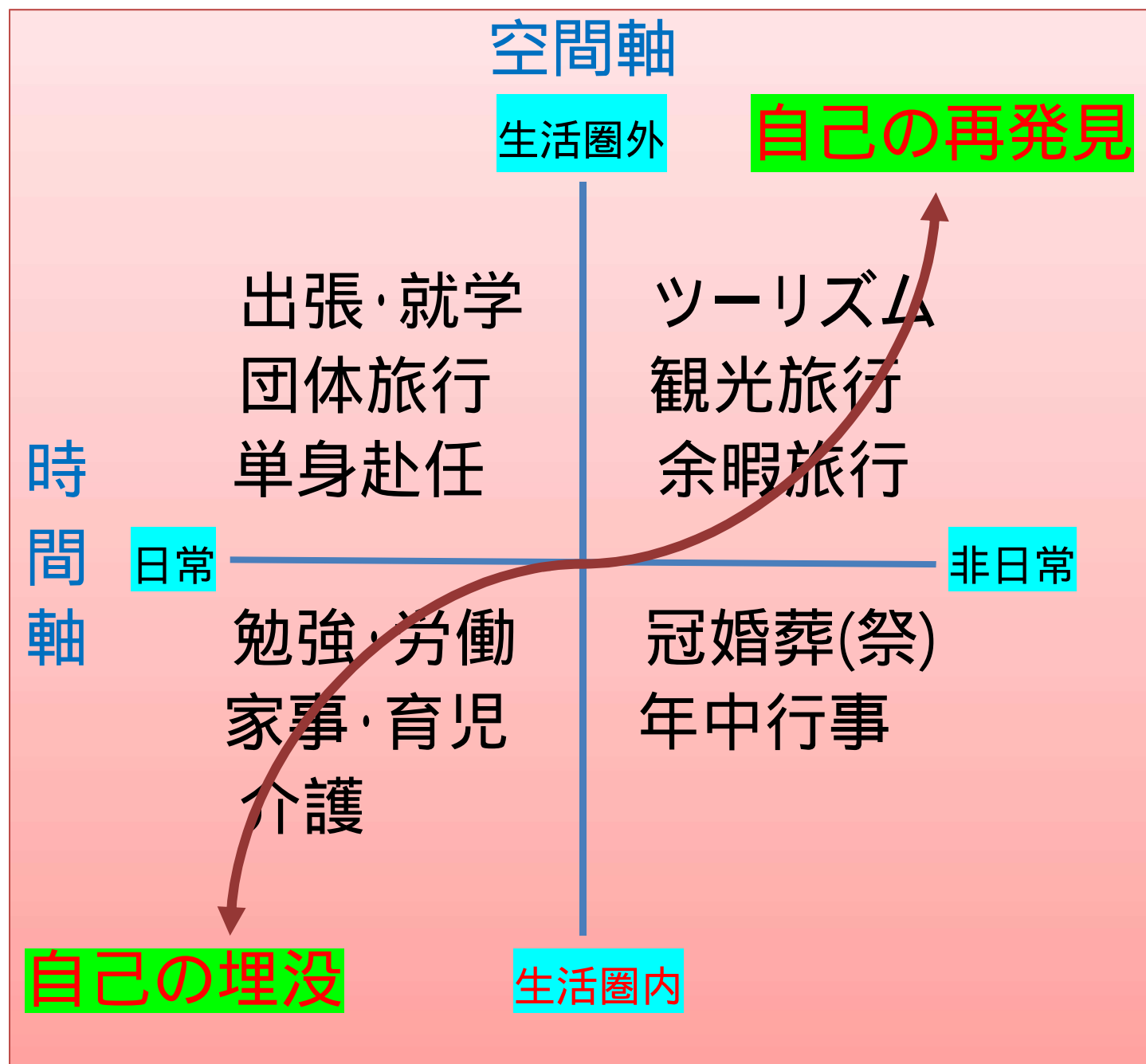
『観光学辞典』：

自由時間における日常生活圏外への移動をともなった生活の変化に対する欲求から生ずる一連の行動

「内閣総理大臣官房審議室」：

自由時間(=余暇)の中で、鑑賞、知識、体験、活動、休養、参加、精神の鼓舞等、生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足するための行為(=レクリエーション)のうち、日常生活圏を離れて異なった自然、文化等の環境のもとで行おうとする一連の行動

# ツーリズムとは？



# 旅行と旅

ツーリズム : 自己の解放、内省的になること  
(旅) 一定の経験(加齢)が必要  
自然があり一人か少数であるといい  
道中や行った先に身を置くだけでいい  
(何もしないこともしばしば)

観光旅行 : 「観る」ことが主

余暇旅行 : 短い、(自然の中にあっても)人工物が  
必要、多人数での遊び



# ツーリズムの定義

最初の授業で「ツーリズム」とつくものをみなさんにいろいろ挙げていただきましたが「究極」のツーリズムを定義づけると…

ある場所に住む人が短期間慣れ親しんだ時空間から意図(目的)的に「逃避」(自己の解放)し別の場所と「合体」することで時空間を消費し、(結果的に)自分自身をリフレッシュあるいはリセット(自己を再発見)する

# 一つの事例：スコットランド

スコットランド →

別荘地・レジャー地として早くから発展する

統一される(10世紀)前の歴史遺物も多い  
(主に)イングランドとの戦いの歴史があり  
その史跡が豊富に残されている  
それについてのすぐれた物語や詩がある  
自然(谷・水・石)の美しさ  
危険が少ない(登山ではなくトレッキング)  
旅の基本要素(宿・食・飲み物)が質・量とも揃う

# 日本でなじみの「英国/イギリス製品」 → 実はスコットランド産が多い

- ・タータン製品(マフラー・セーター・スカートなど)
- ・バグパイプ
- ・ウイスキー(スコッチ)の聖地(メーカーは130社ほど)
- ・ゴルフの聖地(セントアンドリュースなど数百ある)
- ・民謡(蛍の光・故郷の空[ライ麦畑]・スコットランドの釣り鐘草・アフトンの流れ・ロッホローモンドなど)
- ・菓子類(ショートブレッド・スコーン・マフィン・オートケーキ・ダンディーケーキなど)

## 少し休憩

みなさんはここに挙げたもので  
持っている

食べたり・飲んだり・作ったりしたことがある  
テレビ・映画・書物などで読んだ・見たこ  
とがある

ひょっとして、「これ/あれ」はスコットラン  
ド産ではないかと思うが  
というものを教えてください。

# ツーリズムの対象としてのスコットランド

17～18世紀、イギリスにとって文化・文明の先進地はイタリアやフランスであった。しかし、18世紀末、ルイ王朝の没落とフランス革命、さらに19世紀になるとナポレオンの登場で政情不安が続く。イギリスはアメリカ独立を許したものの、オランダとの戦争に勝利し、産業革命を強力に推進することで世界を席巻していく。また、政情不安の続く大陸は貴族たちにとってツーリズムの対象ではなくなり、その代替地を国内に求めざるを得なくなる。

[↓ John o' Groats]



# なぜスコットランドか？

富裕層が求めていたもの・・・スイスの自然、伊や佛の文化  
スコットランド・・・行きやすい、手つかずの自然が残る、未開・  
未知の人々(冒険心をくすぐる)、危険が少ない、英語が通じる  
世界一の国として自国(イングランド中心)の文化と文明を磨き  
あげる → 大陸へ行けないことが外国かぶれから脱する丁  
度いいチャンスとなる

[↓ アイラ島]

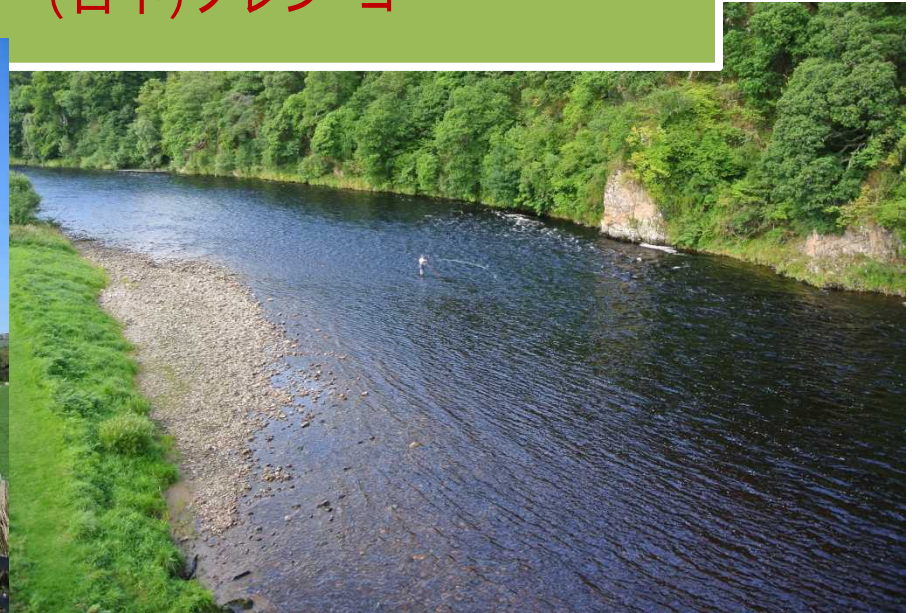




(左上)グレンリベットの谷  
(左下)オールドマン・オブ・ストール



(右上)スペイ川]  
(右下)グレン・コー





# 「スコットランド」とは



イギリス(英国・連合王国・・・国籍=British)

{ 大英帝国 (England, Wales, **Scotland**)

{ 北アイルランド

[↑ Talisker]

スコットランド～1707年にEngland議会と合同

それまでは独立王国(ハイランドでは王政を失うことに反対する一派が暗躍する)

それ以前は部族(クラン)の集合体

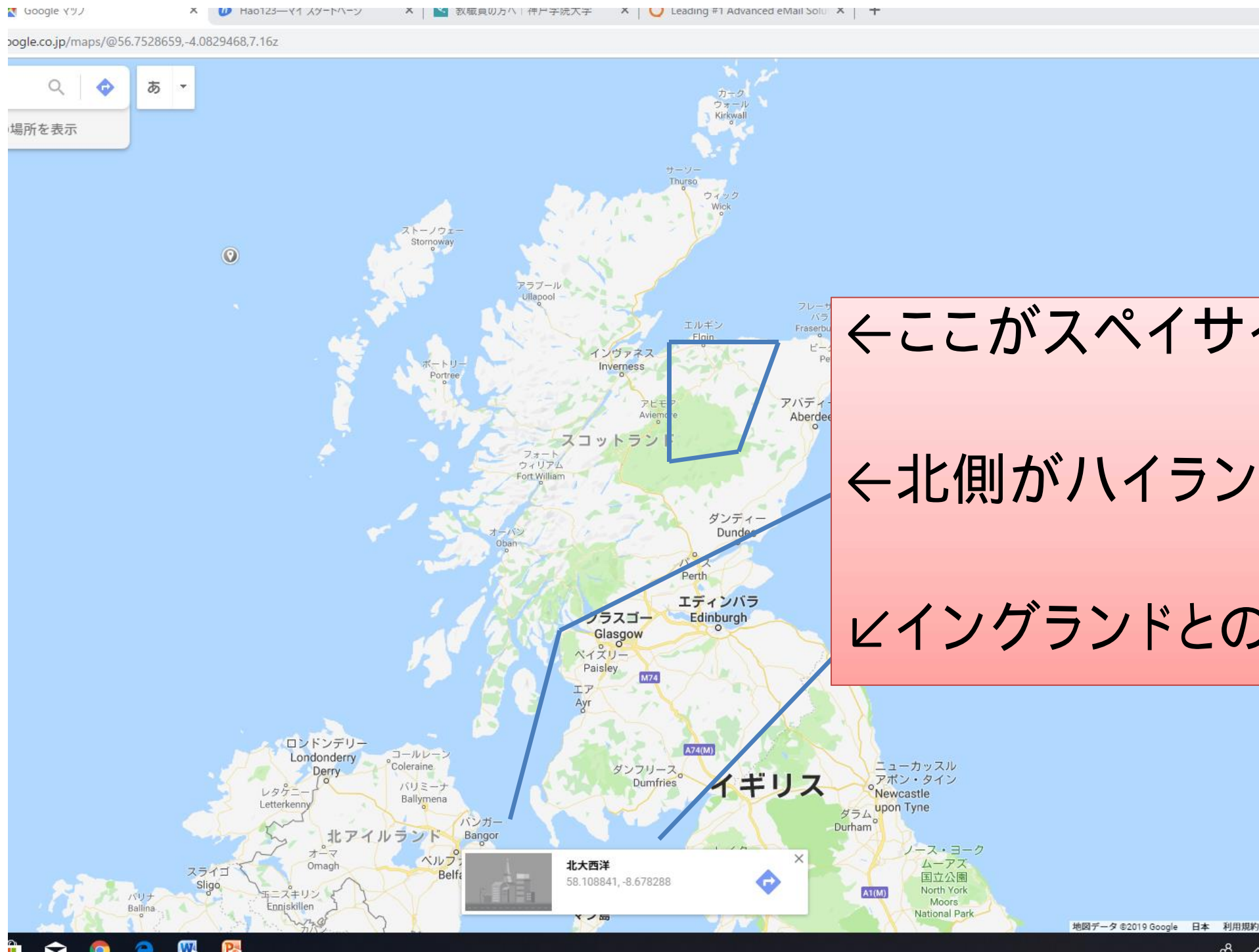


	連合王国	スコットランド
人口	6,511万人	537万人(8.3%)
面積	243万km <sup>2</sup>	78万km <sup>2</sup> (32%)
気温	18/5	17/4









←ここがスเปイス

←北側がハイラン

←イングランドとの

# 人と文化



ローランド・・・イングランドに近く、農業地帯 [↑ 国旗]  
セントラル・・・グラスゴー、エディンバラ、ダンディー、アバディー  
ンを中心に全人口の3分の2が住み、商工業が盛ん  
ハイランド・・・島嶼部を含み地形も厳しくやや孤立している  
寒冷な気候、農業も制約されるが「スコットランド」的な  
ものの多くはここから生まれている



# 歴史

紀元後・・・ローマ軍の侵入を受けるも反撃。ローマ帝国は「壁」を築くことで、蛮族の侵入を防ぐ。これがスコットランドとイングランドの境界となる。その後スコットランドが統一され王国となるや、イングランドの侵略を受け戦いを繰り返す(「ブレイン・ハート」)。1603年、イングランド王・エリザベス1世の死後、スコットランド王だったメアリーの子・ジェームズ6世がイングランド王・ジェームズ1世として即位。イングランドとスコットランドは同一人物を君主とするようになることで両国は接近。1707年、両議会がひとつになる(スコットランドはイングランドに事実上併合される)。合同に至るまでは内部紛争があり、また合同後も1746年まで愛国者たちの反乱は続き、多くの血が流される。その悲劇は今も語り継がれ、あちこちに歴史遺産として残される。

[↑ スターリング城]



# ハイランド

18世紀半ばまでは「秘境」「未開の地」

1746年、カロディンの戦い後、イングランドはハイランド・クランの伝統や文化を徹底的に排除、言葉を含めイングランド化を推進する

ハイランドの農地は牧場化される(クリアランス)

多くの農民は移民となって北米などへ移住

イングランド軍を展開するため道路を整備→密輸ルートとなる

[↓ クライド川を走行するウェーバリー号(外輪船)]





(左上)ロバート・バーンズの生家

(左↓)観光客向けの装束とバグパイプ

(右上)キリークランキーの谷

(中央下)スコット像

(右下)男性の正装





# スコットランドのアイデンティティ

1707年:イングランドとの議会合同  
これが逆にスコットランドのアイデンティティに目覚める

『オシアン』の発表(1765)

「フィンガルの洞窟」の発見(1772)

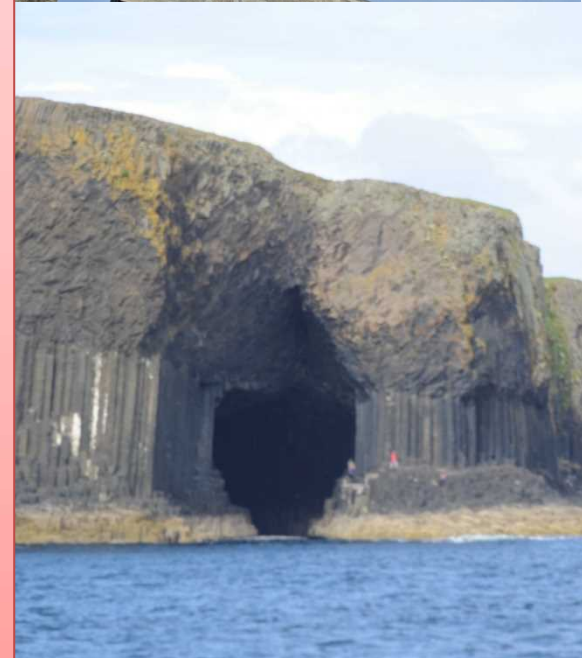
啓蒙思想家たちの活躍

ロバート・バーンズ(1759-96)

ウォルター・スコット(1771-1832)

[スターリング城にあるブルース像 ↗]

[フィンガルの洞窟 →]





# 「未開」からGreat Britainの「顔」へ



1822年・スコットの招きで国王・ジョージ4世がエディンバラを訪問

- ・大規模な歓迎行事

- ・ハイランド文化の解禁

- ・その時、スコットはハイランド産ウイスキーで歓迎する一方、国王は密造酒・グレンリベットを所望された？

1824年グレンリベットは合法業者第1号として登録

その後密造業者は減少、多くが合法業者となる

このあとウイスキー産業は隆盛となるが、ツーリストたちが工場を訪れようになるのはごくごく最近のこと

[← The Glenlivet]

# スコットランドへの旅

旅の目的はハイランドの自然と文物を観たり楽しむこと  
サミュエル・ジョンソン(1773)、ワーズワス兄妹(1803)  
蒸気船と鉄道の充実が拍車をかける  
メンデルスゾーン(1829)、ショパン(1848)

[↓ Lapgroaig]

[↓ Highland Park]





# トーマス・クックによる団体旅行

イングランドと陸続き・危険がない・自然豊か・歴史、英語

→ 旅行に縁のない人々を惹きつける

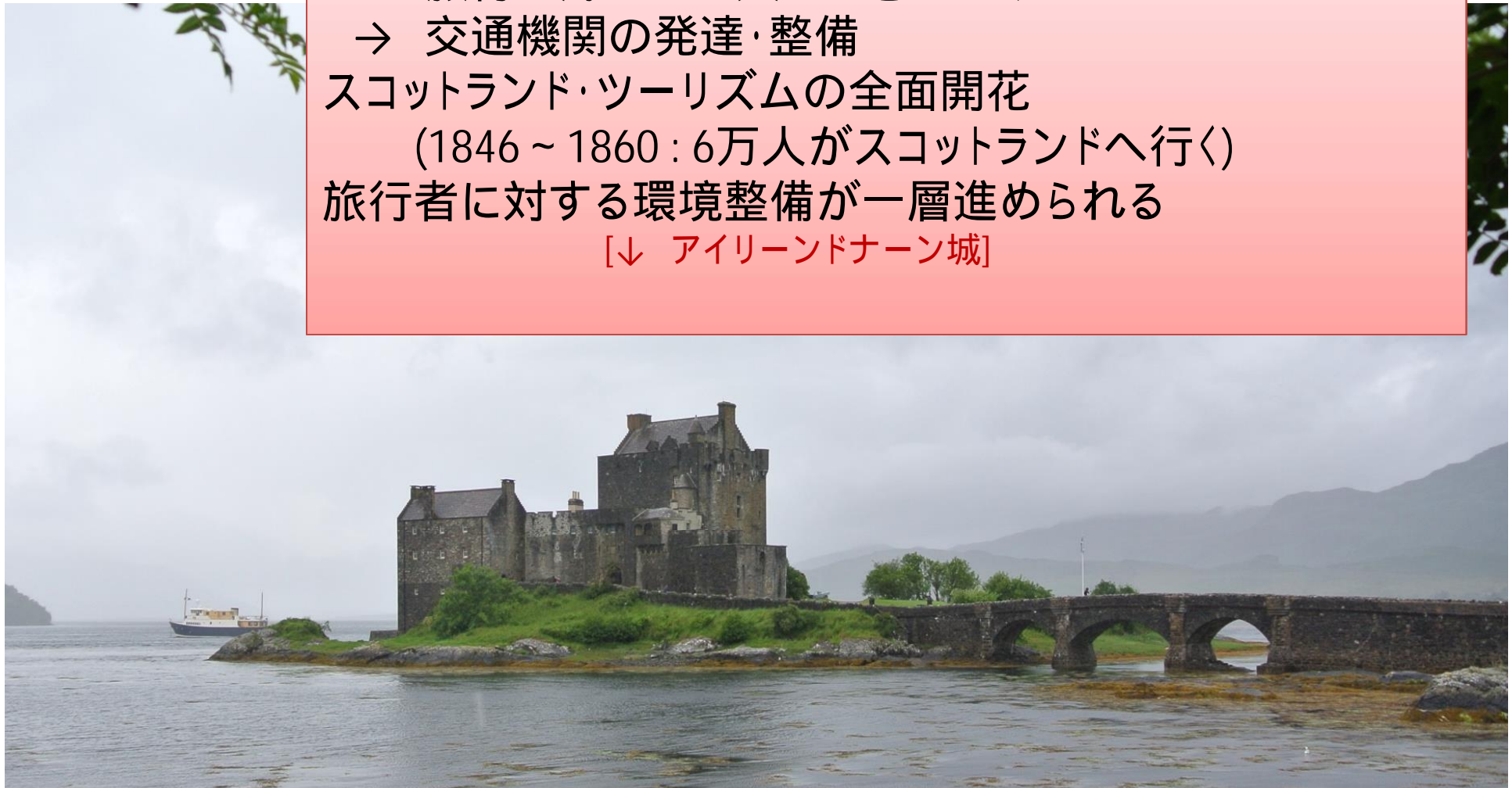
→ 交通機関の発達・整備

スコットランド・ツーリズムの全面開花

(1846～1860: 6万人がスコットランドへ行く)

旅行者に対する環境整備が一層進められる

[↓ アイリンドナーン城]



# スコットランドへ行った3人の日本人

岩倉具視・・・明治政府の欧米視察団

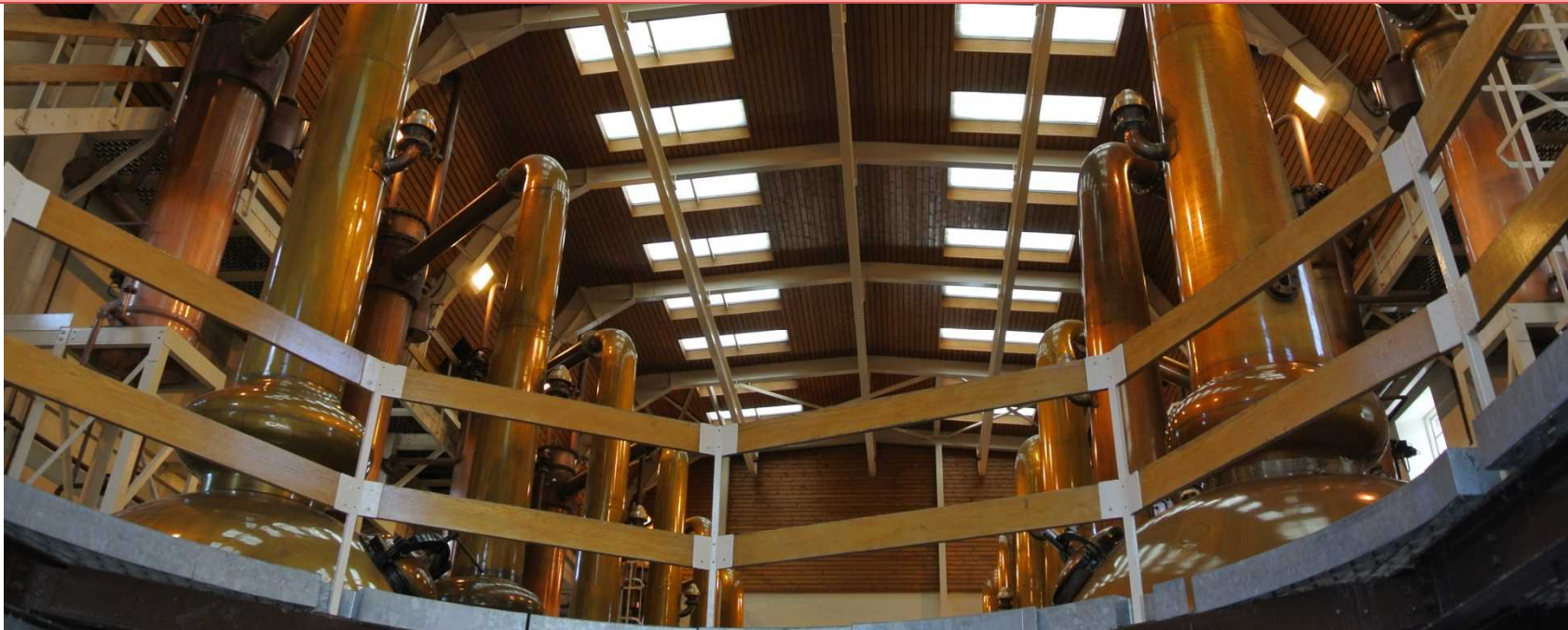
1872年8～12月イギリス滞在、9/7～19日:スコットランドに滞在  
15～17日ハイランドの旅を楽しむ

夏目漱石・・・1902年10月、ピットロッチホリへ行く、2週間程度滞在

竹鶴正孝・・・1918～20年、ウイスキーづくりを学びに行く

妻リタと帰国

[↓ [Glenmorangie](#)]







竹鶴・・・ウイスキー製法を学ぶ(1918～20)

スコットランドの自然が生み出すウイスキー、これに匹敵するものはスコットランド以外で作られないと考えられていたが、20世紀後半以後の世界的なウイスキーブームもあり、日本のウイスキーが注目されることで、再びスコッチが脚光を浴びるようになる      ↑ [Glen Kinglas](#)]



)Craigellachie (中央上)Fettercairn (右上)Glen Scotia  
)Glenfarclas (右下)Glen Grant







(左上)Brora

(左中央)Pulteney

(左下)Dalmore

(右上)Glen Scotia

(中央)Cardhu

(右下)Glenfarclas





# 「お酒」の話

[↓ Glen Grantのスピリット・セーフ]



原料		発酵酒		蒸留酒
葡萄	→	ワイン	→	ブランデー
米	→	日本酒	→	焼酎
大麦	→	ビール	→	ウイスキー



# ウイスキーの歴史

起源は定かでないが、最古の記録が15世紀末のものであることから、それよりかなり前からつくられていたといわれる

普及するのは17世紀になってから → 課税との闘い(密造・密輸)

良質なハイランド産      消費はローランドやイングランドが多い

[↓ Highland Park]



# 密輸・密造



ハイランドでは税率を低くしてもらっても輸出禁止→密輸  
下層民の日常飲料であったが、後に課税される→密造  
1823年～税を一本化/密造の厳罰化  
1824年 Glenlivetが最初の合法業者 [↑ Strathislaの試飲]

# 密輸・密造と課税逃れの功



・樽熟成は、密造取締官の監視の目から逃れるため、たまたま空いた樽にウイスキーを詰めて放置していたことから始まったといわれる

・スチルの形：現在のスチルの形は底面積が広く上部が細くなっている。これはスチルの容量に課税された時代、短時間で大量に蒸留できるようにするために生み出された形といわれる

[↑ Glenfarclasのスチル内部]



# Grain Whiskyの台頭

元祖Malt Whisky・・・大麦100%、2回蒸留、樽詰貯蔵、  
ピート臭・・・くせのある香り・味

Grain Whiskyの登場・・・大麦や穀類、連続蒸留、樽貯蔵  
無味無臭の高濃度飲用アルコール [↓ 朝食の一例]



# Blended Whisky



[↑野生のブルーベル(釣り鐘の形をしている)]

Malt WhiskyとGrain Whiskyの出会い 19世紀後半・・・  
Englandの愛飲家たちが口にしていた飲み物はブランデーであった。しかしフランス産ブランデーの原料であるブドウに病気が発生。長期にわたってワインがつかれなくなり、その代替物としてウイスキーが普及  
時に強い個性をもつMalt Whiskyに無味無臭のGrain WhiskyをBlendすることで飲みやすくなり、人気商品となる

# 五大閥の台頭

Blender・・・MaltとGrainを  
Blendする職人(何をどう  
Blendするかは企業秘密)  
このBlenderたちをかかえる  
Whiskyの五大閥

The Dewars

The Walkers

James Buchanan

The Haigs

Mackies

[Springbankのキルン →]





# 戦後の動向

第二次世界大戦後～アメリカへ輸出して外貨をかせぐ  
しかし、ほとんどがBlended Whisky(くせのないウイスキー)  
米にもウイスキーはあったが、「Scotch」といえば高級ブレン  
ド品の代名詞

[↓ 4種類の樽:左から100L, 200L, 250L, 500L (Springbank)]



# Maltを求めて

- ・ Blended Whiskyの人気が出れば出るほど、愛飲家たちは香味の原料であるMaltを知りたがるようになる
- ・ Whiskyがスコットランドの自然や伝統文化とどうかかわっているのかを語るライターたちの登場
  - 19～20世紀、自然・歴史・文化・レジャーと結びついたツーリズムが発展していく(主にEnglandと大陸から)

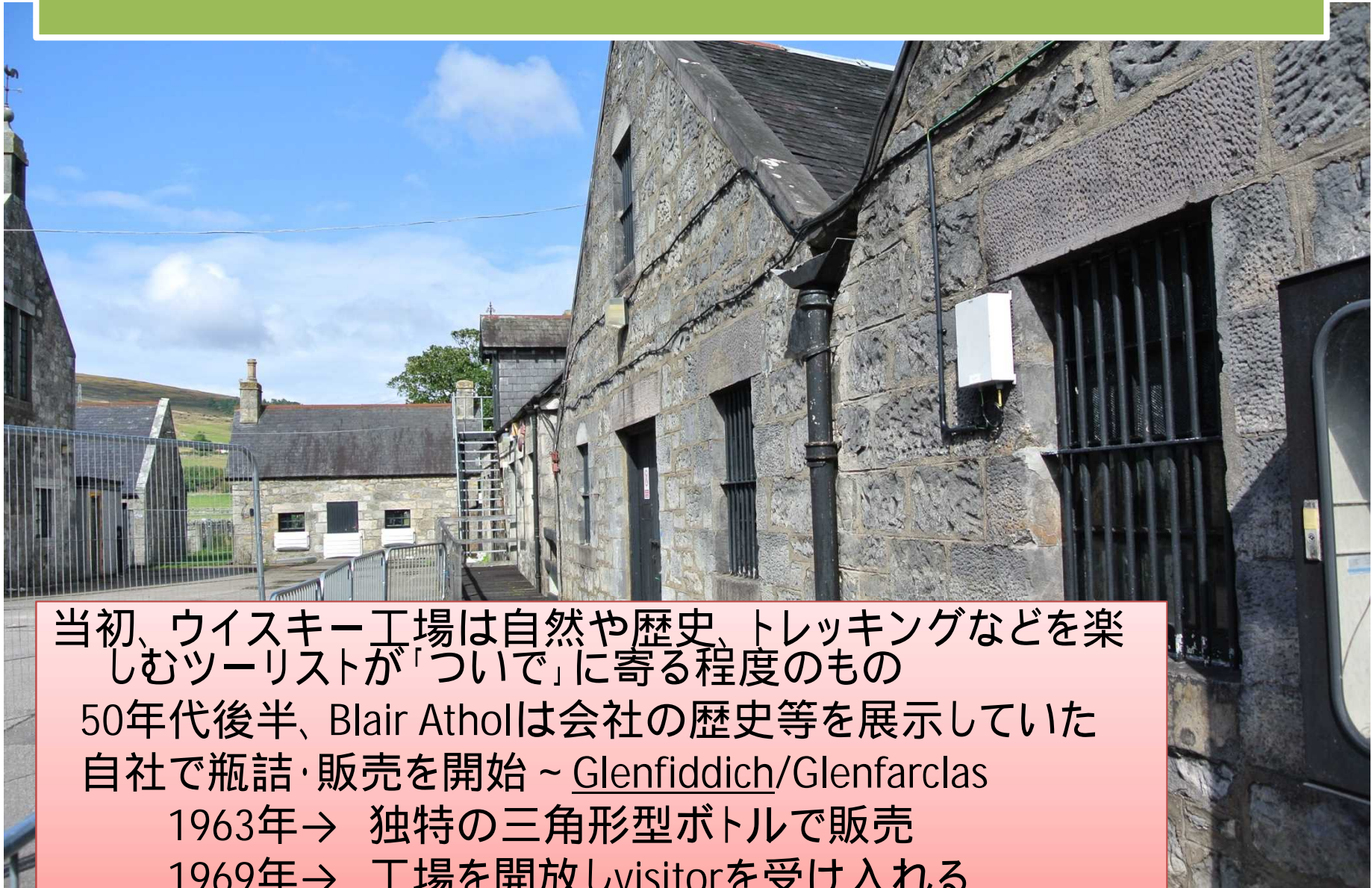
[↓ ScapaのWarehouse]





# Maltの販売

[↓ ClynelishのWarehouse]



当初、ウイスキー工場は自然や歴史、トレッキングなどを楽しむツーリストが「ついで」に寄る程度のもの

50年代後半、Blair Athollは会社の歴史等を展示していた  
自社で瓶詰・販売を開始 ~ Glenfiddich/Glenfarclas

1963年→ 独特の三角形型ボトルで販売

1969年→ 工場を開放しvisitorを受け入れる

これに追隨する各社～もとはやはり単なるウイスキーの工場と倉庫

- ・工場の改築、受け入れ施設の整備
- ・ガイドブックの出版
- ・自社でボトリングしたMalt Whiskyの販売
- ・DCL(ウイスキー連合)もグループの一部でMaltを販売し始める

[Balblair ↓]

## 工場から観光施設へ





1987年、DCLはギネスに買収されるがDiageoへ

→徹底したコストカット、機械化

→積極的な公開

増産と集積が進む理由～多様なMaltの確保=多様なSingle Maltだけでなく、多様なBlended Whiskyの提供

日本のメーカーによる買収→国内産では原酒が不足するため、「スコッチ」への根強い支持にこたえる(サントリー5、ニッカ1、丸紅1)

日本製の拡大→将来の世界戦略のためスコッチグループも容認?

[↓ オークニーのストーンサークル]

再編期







2000年代のウイスキーブーム・・・過去何度も経験してきた苦境を乗り越えてきたことを忘れずに!

[↑ Blair Castle]

2000年代初め以降

増産→閉鎖していたDistilleryをオープン

(Bruichladdich, Glen Scotia, )

新規開業(Kilchoman/2005, Clydesdale/2017,

Torabhaig/2018, Isle of Laasay/2018,

Nen'ean/2018)

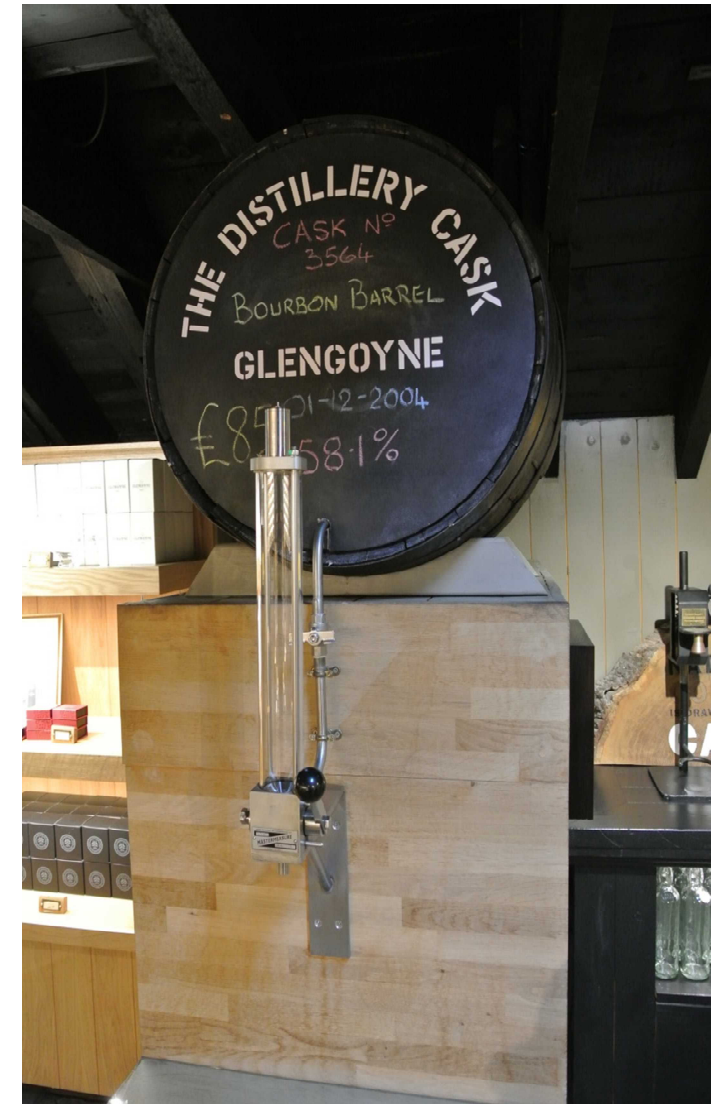
開業準備→CraftbeerとともにGin Distilleryも

新規開店が続くのは、将来の開業に向けた動きか

基本:多様なMaltをできるだけ多くストックしておきたい

[シングルバレルの直販(Glengoyne) →]

再興期



# 現在

## ウイスキー統計(Scotch Whisky Association、2019年4月取得)

- ・世界175の市場に向け、毎秒41本のスコッチ・ウイスキーが出荷されている。毎年12億本を超える。
- ・出荷されたボトルをつなぐと35万km、地球と月の距離の9割になる。
- ・スコッチ・ウイスキーの輸出額は47億ポンド(1ポンド142円とすると6,674億円)。・ウイスキー輸出額はスコットランド全体の飲食品の70%、UKの飲食品の21%、UKの全輸出額の1.3%になる。
- ・スコッチ・ウイスキー業界がUK経済に占める粗付加価値(GVA)は55億ポンド。
- ・スコットランドのスコッチ・ウイスキー業界が直接雇用している労働者は1万人以上、UK全体では4万(人)以上の仕事を提供している。
- ・スコットランドの農村部における7千(人)の仕事は、ハイランドと島嶼部にわたって重要な雇用と投資を生んでいる。
- ・ほぼ2千万樽がスコットランドの倉庫に眠り、口にされる日を待っている。
- ・スコッチ・ウイスキーと言われるためにはスコットランドのオーク樽で最低3年熟成されなければならない。
- ・スコットランド全体で稼働しているスコッチ・ウイスキー・ディスティラリーは現在128である。

# ウイスキー・ツーリズムの魅力

気候 ~ 年によってばらばら。毎日が四季。真冬以外、それほど厳しくなく、春から秋は活動に最適。

自然 ~ ハイランドはあまり高くない山間部も多く、なだらかなglen(谷)とloch(湖・入江)が美しく、一般道が整備されている

Accommodation ~ 基準を満たしたB&BやHotel、レストランなどがReasonableな価格で利用でき、快適な空間や品質が保証されている

[↓ Old man of Hoy : Sky, 香港映画・金城武主演『世界の崖てに』で紹介される]





# ルーツ探し



スコットランド中に歴史とロマンがちりばめられている(内容を知らないとおもしろくないが、ネット上に出ているし、日本語の本もある)

アメリカ・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドなど多くの移民の子孫たちがルーツを尋ねて訪問(Mac一族は多い)。大陸の人たちには避暑地として人気。

現地では車で移動

[← Kelvingrove Parkからみたグラスゴー大学]

# ツーリズムの一コマ

ディスティラリーに行くことだけを目的とする旅行者は少ない。エディンバラ・グラスゴー、そしてネス湖以外に「ここは行ってみたい」というこだわりをもって訪問し、その上で近くのディスティラリーへ立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

ただし、ディスティラリーは不便な所、島嶼部などに立地しているので、足の確保に注意。

[↓ [Royal Lochnagar](#)]





「Hospitality」は経験した範囲内  
しか提供できない

[↓ インバースナイドの滝]

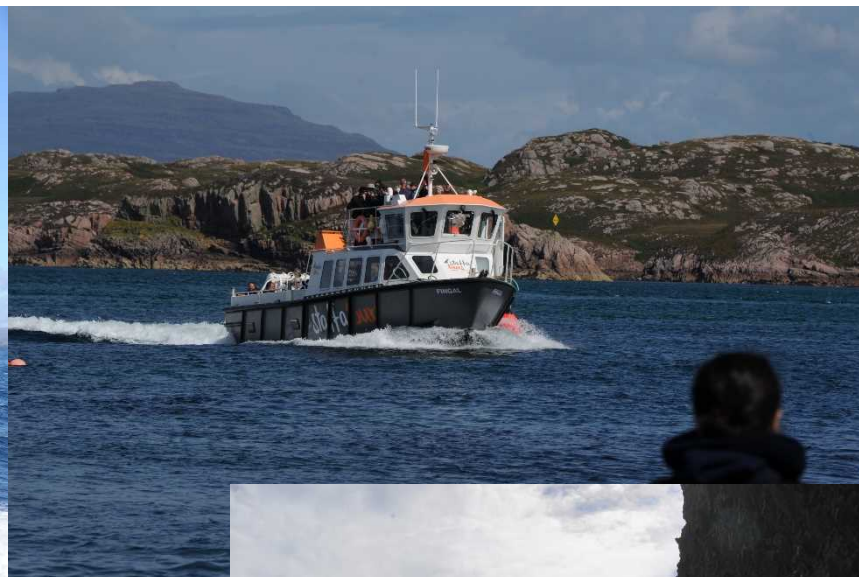




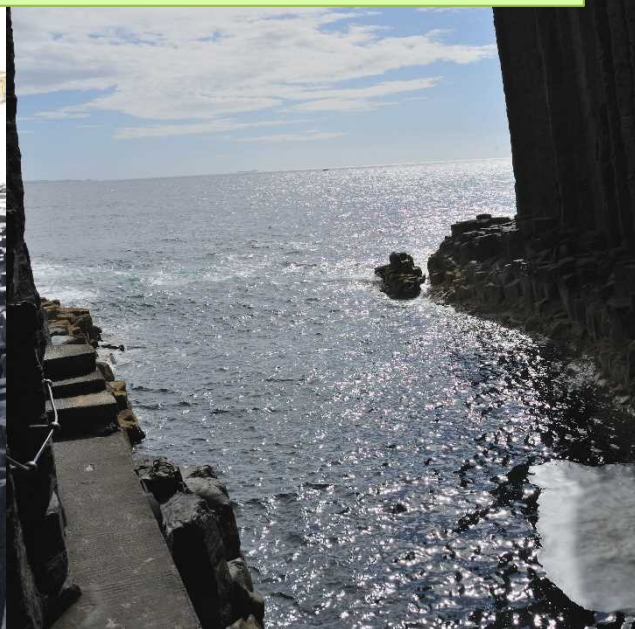
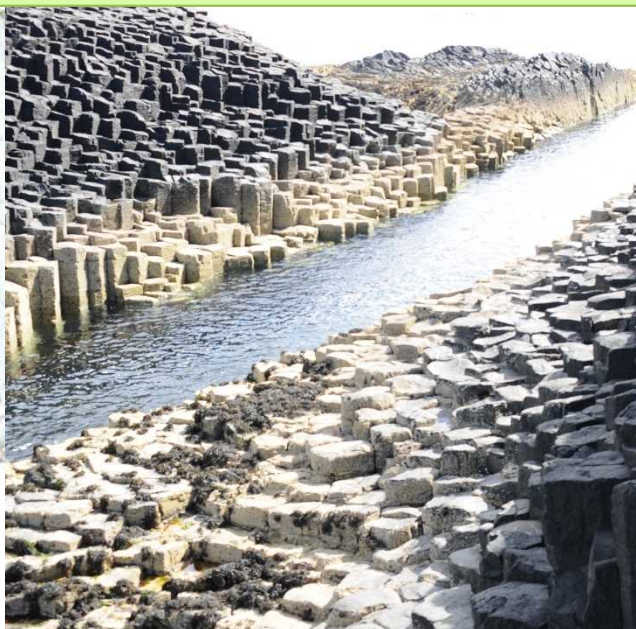
「良質のHospitality」を少しでも多く経験しておいてください







ご清聴ありがとうございます





# KING'S KNOT

Ring road

City centre  
B 8051



Stirling  
Castle

Erskine Br.  
**A 811**

Loch Lomond & Trossachs  
National Park



Loch  
Lomond













